

令和4年度「不登校に関する研修会」(第3回) 講義記録

- 1 日 時 令和4年8月17日(水) 10時から16時
- 2 場 所 姫路市市民会館
- 3 講 師 日本福祉大学 野尻 紀恵 教授
- 4 テーマ ソーシャルワークの視点による不登校の子どもへの支援

5 内 容

(1) 不登校の理由

ア 学校の教員の見立てとソーシャルワーカーの視点と連携について

- ・学校の教員に、ワークショップで①子ども本人の問題、②家族や家庭の問題、③学校の問題、④その他、の4つの観点について「不登校になる理由を書いてください」と問かけると、①と③については具体的で様々なことを挙げることができている。しかし、家庭環境については数が少なく、具体的で詳細に書くことが難しい。このことから、家族に関することへの視点が弱いことが分かる。
- ・ソーシャルワーカーは家庭に関することを見るのが得意である。しかし、家庭のことは見ることも、学校のことは分からないことがある。家庭の支援をしても学校に行きにくいという子どもも多くいる。つまり、いくら外から支援をしても、「学校へ行く」という課題とつながらないことがある。
- ・学校のことや本人のことをよく知っている教員と、家庭のことを知っているソーシャルワーカーが連携しないと解決できないことがある。
- ・最近ではカウンセラー、ソーシャルワーカー等との連携も見られるようになってきたが、本来であれば理学療法士、作業療法士など、様々な職種の人との連携が必要である。
- ・ソーシャルワーカーは学校(スクールソーシャルワーカー)、地域(コミュニティソーシャルワーカー)、医療(医療ソーシャルワーカー)等、さまざまな分野にいる。

イ わたしたちの生活体系

- ・生活するにあたり①ミクロレベル、②メゾレベル、③マクロレベルの3つの視点がある。
 - ①ミクロレベル・・・個人や家族、友だちなどのグループで核となるもの
 - ②メゾレベル・・・学校や病院、福祉機関、NPO法人、警察、保健所など
 - ③マクロレベル・・・制度や施策
- ・普段、過ごしている時にはメゾレベルやマクロレベルのことについてあまり気にならないが、病気や家族の介護など、何かあって初めて知ることや気づくことがある。
- ・ソーシャルワークは、ミクロレベルとメゾレベル、メゾレベルとマクロレベル、

ミクロレベルとマクロレベルなどの関係性で齟齬を起こしているものや、問題を抱えてしまっているという齟齬を軽減していくようにサービスや制度を当てていく役割がある。

- ・マクロレベルには、子どもの権利がある。例えば、労働基準法で子どもの労働を禁止されている。そのため、子どもたちは学校に来ている。法律がなければ、貧困を抱えている7人に1人の子どもは学校に来ず、労働をしているかもしれない。
- ・マクロレベルで法律や制度はあっても、ミクロレベルやメゾレベルで困りごとなどがあると登校することはできない状況になってしまう。

ウ 子どもたちの生活の背景から考える

- ・家族と個人は切り離すことができない。特に子どもは家族と切り離して考えることができない。
- ・子どもたちは見えている目の前のことだけではなく、その背景にたくさんものを抱えて生きている。そして、背景に左右されるため、効果的な支援をするためには様々な情報が必要である。
- ・学校の教員も、子どもたち同士の調整など気づかないうちにソーシャルワークをある程度していたが、家庭での問題については、教員としては具体的な介入が難しい。
- ・ソーシャルワーカーは、外との関係性で困っているときに介入できる。
- ・人はたくさんのシステムを持っている。そのシステムは、時計の歯車みたいなものである。その歯車がたくさんかみ合って行動が起きている。
- ・子どもが小さい頃は、子どもの歯車と親の歯車がしっかりかみ合って、親と同じような動きになる。しかし、子どもの年齢が上がってくると、子どもは子どもで自分の歯車を回し始める。そのため、保護者とかみ合わなくなることがある。
- ・「学校に行けない」という状況は、子どもの「学校に行く」という歯車が止まった状況である。その歯車にいくら油を注いでも動かない。その歯車を止めているのは周りの歯車である。その周りの歯車がかまってしまい、動こうと思っても動けない。それをどうするのか、どこが動くのかを見るのがアセスメントである。そして、動きそうなところに潤滑油を入れる。小さな歯車でも動く、いつか必ず「社会に参加する」という歯車も動く。小学校や中学校の間に「学校へ行く」という歯車が動くとは限らない。内閣府の子ども・若者育成支援施策では30代までを対象としている。39歳までに「社会に参加する」という歯車が動けばいいという仕組みである。
- ・教員としては、「今私のクラスで何とかしよう」「今外に出なければとんでもない大人になる」という考えは変えてほしい。小さな歯車を動かせば必ずいつかは動くので、長い目で支援をしてほしい。
- ・社会からの刺激や、タイミングの良い働きかけがなかったら、39歳を過ぎても引きこもりにつながってしまうことも考えられる。そのため、違う歯車を動かすことで社会とつながっておくという支援が必要である。
- ・子どもにどのような言葉かけや支援をするのかを見極めるアセスメントが大切である。

(2) 子どもの抱える困難の様相

ア 課題

- ・課題は、多様化、複雑化、低年齢化、長期化である。
- ・不登校や行き渋りの年齢が低年齢化してきている。小学校や幼稚園、保育園でも見られるようになってきた。
- ・社会の構造の中で長期化している。情報を捉え、アセスメントをして、できることから取り組むことが重要である。

イ 共生社会の考え方

- ・社会の仕組みが変わってきている。

排除：EXCLUSION・・・障害者や高齢者などを排除していく考え

↓

隔離：SEGREGATION・・・障害者や高齢者などはその人に合った施設などで生活等をしていくという考え

↓

統合：INTEGRATION・・・障害者や高齢者などが地域の中で生きていくという考え

↓

包摂：INCLSION・・・多様な人がそれぞれの力を活かして活躍するという考え

- ・包摂の社会を作り出していくために、今躓いている人をどうすれば良いのかを考える必要がある。

ウ スクールソーシャルワーカーとの連携による支援の視点と方法

- ・最初の情報共有を丁寧にする。
- ・本人の自己決定を大事にする。
- ・セーフティネットを作っておく。
- ・学校に行けないのは子どもと環境の間に不適合を起こしている状況になっているからである。環境調整をし、子ども本人に教育を届けることが大事である。
- ・貧困を抱えている子については、よりスクールソーシャルワーカーの介入や他の機関とつながることが大切である。貧困を抱えている家庭については、様々なところとつながっている可能性があるのも、そちらと連携を取ることも必要である。
- ・ヤングケアラーはクラスに2人程度居る。そういう子たちには、まず「どうしたいの？」ときくことが大切である。
- ・環境調整をしていくと、子どもの暮らしのシステムが動き始める。

エ スクールソーシャルワークとは

- ・学校を基盤に生徒の問題に寄り添い、家庭環境などの環境面への働きかけを行う福祉の専門職のことである。
- ・人生の行く先を視野に入れた切れ目のない支援のために、人生のそれぞれの段階にあった重層的な支援を念頭に支援者や住民活動の横のつながりを意識して、切れ目のない支援の展開を考えつつ、人々の「エンパワメント」が可能となる地域における場の創出をする。

(3) 理論的枠組み

- ・不登校の本人も保護者も悩んでいる。
- ・本人は、「学校に行かなければならない」と思っており、行けないことに葛藤がある。そして、自分を否定されることで劣等感を抱く上、自分自身でも自分を否定している。
- ・成功体験を積んでいくことが、自分を受け止めていく一歩になる。
- ・人からどう見られているのかというところを越えていかなければならない。
- ・下がった自己肯定感を上げ、自分の力を発揮するためには、受け止めてくれる場が必要である。
- ・子どもたちは必ず葛藤（ジレンマ）を抱えている。その中で必要なことは、誰かに受け止められる経験である。
- ・自信をなくした状態では、学校に通うということを前提にした働きかけは難しい。
- ・学校に通えないという状況は本人だけではなく、学校に通っていることを前提とした社会構造の中で起きている。社会の中で起きているジレンマを社会の中で生きている我々が一緒に考える、ということが重要である。
- ・抑圧は、様々な「生きにくさ」や「モヤモヤした違和感」、「やりきれなさ」、ひいては「絶望感」として出てくる。抑圧の中に入ると、簡単に出てこられない。そして、どのような子どもでも抑圧の中に入ってしまう可能性がある。
- ・不登校の子どもたちは社会から切り離されてしまう。社会の中で抑圧を感じている子どもたちに、「学校来たらいいやん」の一言では学校復帰などは難しい。
- ・それまでの生活経験を目安に将来を展望するという事実にとれば、不登校の子どもたちはまず豊かな体験をすることが重要である。
- ・適応指導教室などに行くと、まずは勉強になってしまうが、豊かな体験がないと自信も持てない。そのため、遊びや体験を作り出していくことが重要である。
- ・抑圧された子どもたちが体験や豊かさを感じると、生きにくさを自分で解消していくことができる。
- ・場を用意することで、生きにくさからの解放になる。
- ・抑圧からは解放しなければならない。解放の道筋を居場所で作ったり、関係性の中で作ったりすることが重要である。
- ・抑圧からの解放はスクールソーシャルワーカーの分野でも新しい考えだが、非常に重要である。

(4) まとめ

- ・子どもたちは必ず力がある。子どもたちが力を発揮するまで待つ。そのために必要なのがチームアセスメントである。
- ・専門職がたった一人では十分なアセスメントが難しい。相性、おかれた立場、価値観、経験の差、専門性の違い、様々な違いによっていろいろな視点がある。その様々な視点が集まってアセスメントを重層的に行う。それが総体として子どもを見ることになり、それができれば必ず子どもは力を発揮することができる。

（記録：県立但馬やまびこの郷）